

たかちし史話 41

『鎮増私聞書』を読む

応永三十二年（一四二五） 世間の見方があつたことも紹介してあります。

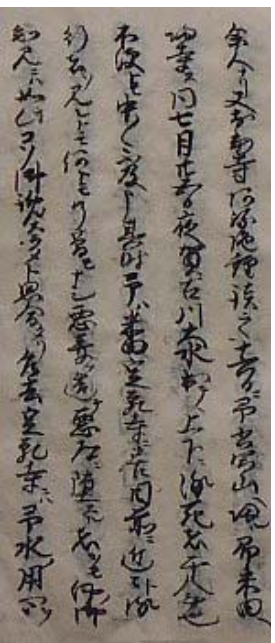
七月二十五日夜、加古川の大洪水で千人余の人が亡くなりました。これは、当時播磨国米田の定願寺に住した僧、鎮増ちんぞうによつて記録されたものです。五十一歳の鎮増はこの時の模様を「目前に近々と流れゆく者を見れども、何とも了簡りようけんなし」と、手の施しようもない大規模災害に直面した中世人の心情を率直に著しています。

ところで鎮増は、応永十九年（一四一二）十一月十四日早朝に「大地震」も経験していました。この時は、「米田の東西十里ばかり」の寺社や人家が倒壊し、多数の人々が亡くなったことを「この世の終わりかと思つた」と記しました。

（高砂市史編さん専門委員
梶木良夫）

梶木良夫

だが「他国」にそれほどの被害がなかつたとの風聞と関わらせて、「後々よく考えてみると、これは守護赤松氏滅亡の予兆であつた」とする



書樂 聞昌（私聞書）
鎮増（粹蔵）
▲（技所寺）